

インテリ国王の「嫌煙」闘争

——一七世紀の嫌煙論は二一世紀にも有効か——

塚 田 富 治

はじめに

嫌煙権という言葉がある。「権」という語がつくために、うっかりすると法律用語のように思ってしまうが、後見権や入会権などのような法律上認知された言葉とはいえない。きわめて当然で、健全なことだ。「何か」を、あるいは「誰か」を「嫌うこと」が権利として認められるようになれば、いじめや差別が合法化され、不寛容で抑圧的な社会が出現することになるだろうからである。たとえば、社会の多数者が納豆を食べる人々に嫌悪感を抱き、それを根拠として「嫌納豆を食べる人」権が成立し、納豆を食べる人が抑圧される社会を想定してみるとよい。ジョン・ステュアート・ミルが『自由論』のなか

で危惧するような、社会のなかの多数者による専制が法によってサポートされる可能性が開かれるのである。

さらに「好き・嫌い」を権利の根拠とすることは、ひとつの権利をめぐるすら無限の論争への途を開き、論理的にも破綻してしまう。タバコの煙が嫌いな人が「嫌煙権」を主張する。それにたいして愛煙家が「嫌煙」など嫌いだと『嫌「嫌煙」権』を言いだす。これに負けじとタバコの嫌いな人が『嫌「嫌嫌煙」権』をもっと過激な人が「権利」それ自体を嫌いだと言いだし、『嫌「嫌煙権」権』を主張するかもしれない。これに負けじとタバコの嫌いな人が『嫌「嫌嫌煙権権」権』を。何某と、愛煙家が『嫌「嫌嫌嫌煙権権権」権』を。さらにまた喫煙反対派が『嫌「嫌嫌嫌嫌煙権権権権」権』という

ことに。このように「好き・嫌い」を根拠に権利を主張するようになる、嫌煙派と喫煙派の権利をめぐる戦いは無限につづくことになるのである。

論理的な破綻ならまだよいが、万人が「好き・嫌い」を根拠に権利を主張するならば、その状態はトマス・ホップズが『リヴァイアサン』で述べた自然状態と同一であり、やがて権利についての無政府状態から、万人の万人にたいする戦争状態へとエスカレートしていく可能性すら生まれる。

前口上が少し長くなりすぎ、本論が嫌煙権をめぐる法学、あるいは政治学の論文と思わせるような印象を与えてしまったが、本論が対象とするのは、「嫌煙」「憎煙」を明確に宣言し、ペンを手に巨大な有毒煙幕に立ち向かったドン・キ・ホーテのようなインテリ国王の言説である。タバコの煙の不快さに我慢しきれず、ついに反タバコ論のペンを執った嫌煙派のひとりである国王ジェイムズについて特筆すべきことは、イングランドとスコットランドの国王として強大な権限をもっていたにもかかわらず、「嫌煙」を権利として主張し、それを根拠に喫煙者を取り締まろうとはしなかったことである。そうした

判断が賢明であったかどうかは、二一世紀にまで延長されてよい歴史の判断に待つとして、国王ジェイムズは「好き・嫌い」を権利とするような、乱暴で無茶苦茶な専制君主ではなかった。愛煙家、喫煙者を強権によってねじ伏せるかわりに、ジェイムズが試みたのは言論によって愛煙家の屁屈を論駁し、喫煙者の非道をあからさまにすること、タバコの流行をくい止めることであつた。

以下本論においては、匿名で国王ジェイムズが著した『反タバコ論』を、筆者の普段の方法論からは大いに逸脱するが、今日的関心を煌々と逆照射しながら、その内容を検討していくことにする。⁽¹⁾

1 タバコはイングランドにおいてなぜ流行したのか

国王ジェイムズは濛々とたちこめる有害な紫煙の背後に、明らかにそれと分かるタバコ流行のプロモーターが存在することを知っていた。ジェイムズがタバコの大流行をくい止めるために「何を」、そして「誰を」直接のターゲットとして執筆していたかを理解するために、当

時のタバコ事情とタバコをめぐる言説を、まず明らかにしておこう。

ジェイムズが『反タバコ論』を執筆するおよそ半世紀前にイングランドに持ち込まれた喫煙の習慣は、一七世紀に入るとロンドンを中心に大流行の状態にあった。このタバコの流行に最大の貢献をした人物は、いくつもの戦績をあげた勇猛な軍人であり、地の果てまで船を進める恐れを知らない航海者であり、女王エリザベスに愛された宮廷人であり、そして全七巻にも及ぶ著作をもつにする知識人でもあったウォルター・ローリー卿であった。

このような時代の寵児でありオピニオン・リーダーでもあったローリーをとおして、喫煙の習慣はまずロンドンの宮廷を中心に広がっていった。ローリーが点火用の小さな彩色蠟燭付きの黄金の煙草ケースを開き、会話のなかで銀をはめ込んだ長いパイプを振り回しながら、議論を展開し、それから椅子にゆったりと寄りかかり、相手が反論できないことを確かめたうえで、一言もしゃべらずにぞんざいな態度で煙草の煙の輪をふかす様子を見た者たちは、喫煙の虜になったと言われている。洗練された審美眼をもつ鑑識家ローリーはタバコを社交上の必需品

品にしたのである。⁽²⁾

一七世紀前半、ロンドンに滞在したヴェネツィア大使の随員は、ロンドンの上流階級の婦人たちが薬と称して、こっそりとタバコを吸っていると報告している。宮廷ばかりでなく、タバコは聖職者や庶民の間にまで広がっていた。ロンドンのある聖職者は昇進の望みがたれたことを悲観して、タバコを暴喫して、命を落とした。また、サザックの劇場に群がる観衆はタバコをパイプに詰め、紫煙で舞台がかすむまでタバコをふかした。大学町オックスフォードでもタバコは学生たちを虜にしたようである。一七世紀半ばに改定された大学法規には、学生はどのような身分のものであろうとも、タバコ類を商っている場所に入りしてはならないと明記された。一〇代の半ばで大学の門をくぐる者が多かったこの時代、この禁令はきわめて適切であるといえよう。⁽³⁾

地方へのタバコの普及は列伝作家ジョン・オーブリーの記述からうかがうことができる。「北ウィルトシャーのわれわれの住む地方、たとえばマームスベリーでは、煙草を最初にはやらせたのはサー・ウォルター・ロングである。私は祖父ライトが、テーブルを囲んで座った人

の手から手へ一本のパイプが廻されていたものだ、と語るのを聞いたことがある。銀のパイプまでできていた。

普通のものは胡桃の実と藁で作られていた。当時煙草は、銀貨と引き換えに同じ目方だけ売られていた。マームズベリーやチツペナムの市場に行つて、煙草をはかる秤に載せる大きなシリング貨を選び出して来たものだ、と近所の小地主の老人が語るのを私は聞いたことがある⁽⁴⁾。

またオーブリーは、ローリーが持ち込んで流行らせたタバコによって、イギリスの国家財政が支えられているとつぎのように述べている。「三五年くらい前までは、

聖職者が煙草を吸うことは醜聞になった。それが今は、煙草の関税は陛下の最大の収入となっている。王立協会の記録係で税関の役人でもあるマイケル・ウィーク氏から確かなこととして聞いたところによると、イギリス全体で煙草の関税は毎年四〇万ポンドにもなるという⁽⁵⁾。

煙草を流行らせたプロモーターということであろうか、ローリーと煙草をめぐるエピソードは数多く存在している。新しい奉公人が喫煙中のローリーを見て、主人に火がついたのか、それとも口から煙を吐いている悪魔に取りつかれているのかと心配して、バケツ一杯の水を頭か

らかけたというエピソード。そして煙草の煙の重さを計量できるかどうかで、女王エリザベスと賭けをしたというエピソード。このときローリーはひとつまみの煙草をまず計量し、つぎにそれを吸ってできた灰を集めて計量し、煙りの重さを言いあてた。女王はローリーに現金を手渡し、「数多くの錬金術師たちは金を煙りに変えてきたが、ローリーは煙りを金に変えた最初の錬金術師だ」と叫んだと伝えられている。煙草をおしてローリーは女王エリザベスと親密な関係を切り結ぶことができたのである⁽⁶⁾。

一六〇三年、スコットランド国王ジェイムズ六世がジェイムズ一世としてイングランドの新王に即位したときから、国王とローリーの関係はいくつかの理由で、陰悪なものであった。ローリーがタバコを流行らせたことも、その理由のひとつであった。タバコは前王のときは正反對に、ローリーと国王の仲を取りもつ小道具とはならず、一層その関係を悪化させることとなったのである。

『反タバコ論』のなかで、「タバコ中毒になっている者は国にとって有害である」と断言するジェイムズは、ローリーをまず念頭に置いていたことは疑いようがない。タ

パコにまつわるローリーの最後のエピソードは、断頭台に向かう直前に、気を鎮めるために煙草を一服吸ったというものである。

イングランドにおける煙草の流行はローリーという格好の宣伝媒体の存在に負うところが大きい。しかしそれほどばかりではなく、ヨーロッパの他の国々でもそうであったように、煙草が人体にたいして万能ともいえる薬効をもつという評判もまた、煙草の流行に一役買うことになった。その評判の元となり、イングランドでも出版されることになったのは、セビアアの内科医ニコラス・モナルデスによって一五七一年に出版された新世界の薬草誌であった。「モナルデス以降、すくなくとも一八世紀末に至るまで、煙草について論じる者の多くはモナルデスの説明をそのまま繰り返すか、しばしば文章すらそっくりまねた」と言われるほどに、モナルデスの煙草万能薬説は、それ以降ヨーロッパ世界で圧倒的な影響力をもった。イングランドにおいてこのモナルデスの作品は一五七七年、ジョン・フランプトンによって『新しく発見された世界からの楽しい報告』と題して出版され、九六年

までに三度版を重ねることになる。

フランプトンは献辞のなかでモナルデスの著作が「これらの薬草による以外には治らなかつた様々な重病の奇跡的な治療法によって、わがイングランド国民にすばらしい利益をもたらす」と宣言する。そうした薬草としてモナルデスが最初にとりあげ、二二ページもの紙幅をつかって記述しているのはタバコについてである。モナルデスはまずタバコの一般的な効能について「熱する力と溶かす力をもち」、「あたらしい傷の痛みを和らげ治し、化膿した傷や古傷を清め完全な健康状態にもどす」と記している (m. 77)。

一般的な効能につづけて、モナルデスは頭痛を手はじめに、個々の病気についてのタバコの治療法を列挙していく。「この薬用植物のタバコは頭痛を治す特別の効能をもっている。とくに寒さが原因でおこる頭痛にはそうである。温められたタバコの葉を患部にはり、痛みがとれるまで必要なだけ繰り返すこと」(p. 78)。タバコが効能をもつ病気としてモナルデスがあげるのは、頭痛、痰や息切れをともし胸郭疾患、胃痛、消化不良、便秘、腎臓結石、ヒステリー、寄生虫駆除、関節痛、腫れ物、

歯痛、しもやけ、毒矢による傷や有毒動物に咬まれた傷、悪性の吹き出物。

さらにガマの油売りの口上のような記述がつづく。

「ケガによって新しくできた傷、切り傷、打撲、刺し傷、そのほかどんな傷にもタバコは驚くべき効果を發揮する」(E. 88)。「この国、この町において人々は切り傷をつくったり、ケガをしたときには、もっとも手早い特效薬として何はさておきタバコを求める。それは外科医などとは必要ないほどに、驚くべき効果を發揮する。そんなことができるのはこのタバコという薬用植物だけである」(E. 88)。

怪しげな万能薬や健康食品の宣伝がつねにそうであるように、モナルデスの言葉は歯切れがよく、勢いがある。タバコ流行は薬学上の理論的説明よりも、こうしたレトリックに負うところもあつたにちがいない。小気味よい語り口によって、読者は思わず引き込まれ、いつの間にかタバコの効能を信じたのではないであらうか。

タバコは内科、外科がかかわる病気だけに効果があるのではない。タバコは疲労回復のための薬用植物でもある。モナルデスによれば、インディアンたちは疲れをと

るために、また労働が軽くなるように、タバコを用いる。過度の労働やダンスによって疲れきって動けなくなったインディアンたちは「口と鼻からタバコの煙を取り入れ、死んだような深い眠りにおちいる。そのような状態のなかで体を休めることで、かれらが眠りから覚めると疲れは残っていないく、ずっと元気になって労働につくことができるのである」(E. 88)。タバコには深い眠りを誘い、結果として疲労を回復するという効能があるというのである。

そればかりか、タバコは空腹感や喉の渇きを取り除き、強力なエネルギー源にもなる。モナルデスは長旅をするインディアンに常備薬の説明をとおして、タバコのこの驚異的な力を説明する。「水も食物も見当たらない土地を旅するとき、かれらはタバコからできた小さな丸薬を口にふくみ、下唇と歯のあいだで旅の間中噛みつづけ、よく噛んだものを飲み下す。このようにしてかれらは食物や飲み物を必要とせず、三日四日の旅をつづけるのである。それはかれらが空腹も渇きも、さらに体力の衰えも感じないからである」(E. 90)。モナルデスはこうした効果を医学的につぎのように分析する。タバコを噛

むことによつて、そこから生ずる熱で口の中が暖まる。胃のなかに飲み込まれたタバコはその熱を保ちつづけ、エネルギー源になる(Caloric)。タバコの丸葉は体内に格納され、核物質のようにエネルギーを供給しつづけるという理屈である。タバコは究極の携帯エネルギー源として喧伝されたのである。

煙草を讃えたのはむろんひとりモナルデスだけではなく、⁽⁹⁾「このセペリアの内科医はタバコ治療にお墨付きを与え、植物学者や内科医のタバコ使用を正当化し、ヨーロッパの文化的枠組みのなかにタバコを的確に位置づけたという点において、同時代人のなかで群を抜いていた」。

イングランドにおいて科学者としてタバコ推進の中心的な役割を果たしたのはトマス・ハリオットである。天文学と数学において一七世紀のもっとも優れた科学者のひとりであったハリオットは、後援者ローリーの意を受けて、ヴァージニアの物産や土着民の宗教と慣習の調査を敢行した。この調査にもとづいてハリオットは、一五八八年、『新たに発見されたヴァージニアの地にかんする簡潔にして正確なる報告』を刊行し、ヴァージニアで

とれる物産を紹介した。四〇ページにわたる本文中で、タバコは食料もしくは生命を維持するための滋養物に数えられ、その紹介に他の物産よりも二倍から数倍も多い紙幅が費やされる。後援者であるローリーをも含めて、当時のイングランドにおける喫煙者たちが、タバコにどのような効能があると素朴に信じていたかを、ハリオットの以下の簡潔な記述は伝えてくれるであろう。

「その葉は乾燥され、粉末にされる。かれらはそれを粘土で作られたパイプをとおして吸い込むことで、その煙や蒸気を胃や頭のなかへと取り入れる。そこからそれは不必要な精気やそのほかの不快感を胃や頭から取り除き、身体のあらゆる毛穴や通り道を開く。こうした方法でタバコの使用は、身体を妨害物から守るだけでなく、もしそれがあったとしても、長く体内に留まらないように、短期間にそれらを破壊するのである。そのことによつて、かれらの身体は著しく健康な状態に保たれ、われわれがイングランドでかかる多くの耐え難い病気を防ぐことはないのである。

われわれ自身もここに滞在中かれらのやり方にしたがつてそれを吸ったものだ。そして帰国してからも、その

効能についてめずらしい驚くべき体験をした。その効能については語るには優に一卷の書物が必要になるだろう。近年他の人々にまじって、顕職についている人々や博識の医師たちによっても用いられていることが、タバコの効能のなにより証拠となるであろう⁽¹⁰⁾。

タバコの煙りは消毒剤・解毒剤として体内を駆け巡り、病気の原因となるものを煙と一緒に毛穴という排気口から排出すると素朴に考えられていたのである。ハリオットは他の作物についてはモナルデスの作品を参照するようにと指摘しているが、タバコの記述についてはかなりの違いがある。モナルデスがタバコによる治療法としてタバコの葉を温めて患部に貼ることや搾汁液を塗ること、タバコのシロップを飲むことなど喫煙をも含めた複数の使用方法をあげているのにたいして、ハリオットは主に喫煙による治療法を紹介しているだけなのである。

ハリオットは山師などではなく、自ら製造した望遠鏡によってハレー彗星を最初に発見し、また後世の人から代数学の創始者のひとりとも評される、れっきとした当代一流の知識人であった。⁽¹¹⁾ 幅広い交流関係をもつハリオットは、喫煙の習慣を人に勧めるなどして、イングラ

ドにおける喫煙の流行に貢献した。ハリオットは、鼻から煙を吐き出すことが原因と思われる、鼻のガンで死亡命を懸けてのタバコ・プロモーターだったのである。

科学者ばかりでなく、文人もまたタバコの宣伝に一役買った。ローリイとも交流のあった劇作者クリストファー・マローウである。かれは「タバコ」と題するエピソードのなかで、別世界から発見された神々しいばかりの力をもつ薬用植物をつぎのように讃えている。「かぐわしい中身の濃い煙りによって、地獄の拷問のような歯痛を和らげるのはタバコ。その煙はあらゆる病気を生み育てる水性分泌物を乾かし取り去るからである。悪寒を追い払い、血行障害を治し、胃のなかの不快なものを消化し、死を招きかねない食べ過ぎ飲み過ぎにも効き目があるのもタバコ。朦朧とした頭にかかる雲のような霧を一掃し、明晰な頭脳を取り戻す力をもつのもタバコ。聴覚を妨げる悪性の濃い体液を浄化する力をもつのもタバコ。医者たちをあざ笑う消耗熱や四日熱、通風も治し、原因が歯にあるのが胃にあるのが、呼吸不全の助けにもなるのはタバコ」⁽¹²⁾。

一七世紀の初めタバコがどのようにプロモートされて

いたかを知るには、もうこれで十分であろう。時代の寵児、科学者、そして劇作家、それぞれの世界でオピニオン・リーダーであったこれらの人々がタバコの効用を説き、人々をうっとりさせるような格好よきでタバコをくゆらせていたのである。タバコにはいまだ汚染されていないスコットランドから南下する国王ジェイムズを待ち受けていた禍々しきもののひとつこそ、「目に忌まわしく鼻に不快な」タバコの煙であり、煙幕の背後にいるそのプロモーターたちなのであった。

2 『反タバコ論』

一六〇四年、イングランドの王位についたばかりの国王ジェイムズ一世は、匿名で『反タバコ論』を公刊した。学問好きの国王にとって、それはイングランド国民にたいして自らの知識とタバコ推進論者の論理を論破できる知力を示す絶好の機会であった。⁽¹³⁾ しかも国王ジェイムズは生理的にも大のタバコ嫌いだ。タバコの煙を「悪臭を放つ」「忌ままししい」と形容するジェイムズにとって、タバコは肉体的な拒絶反応を生み出す低劣な嗜好品であった。そればかりではなく、国王としてのジェイ

ムズにとって、タバコは二〇世紀におけるアヘン、大麻、スピード、エクスタシーなどのように、やがては国を滅ぼすことになる禍々しい麻薬でもあった。『反タバコ論』の序文においてジェイムズは、こうした点を中心に、作品執筆の意図をつぎのように明らかにしている。

ジェイムズによれば、「平和と繁栄は全般的な停滞を生み出し、それによって人々はすべての偉大な君主国を滅ぼす最初の原因となるあらゆる種類のくだらない喜びや軟弱な楽しみ⁽¹⁴⁾に溺れるようになる」。政治体の医師を自認するジェイムズは、こうした風潮のうちでも、喫煙の悪習ほどに「卑しく有害な腐敗はない」と断言する。かくしてジェイムズは、平和と繁栄のなかで蔓延し、放置するならば国を滅ぼしかねない喫煙という悪習の弊害を明らかにし、タバコの流行をくい止めようとペンを執るのである。

本章においては『反タバコ論』を論述の順にしたがいながら、その内容を紹介しつつ、全体の構成を明らかにしていくことにする。というのはタバコの歴史を書く人々によって、その数節がつまみ食いされて紹介されることはあるものの、ジェイムズの『反タバコ論』はその

全体が本格的な議論の対象とされたことは、これまでなかったからである。

ジェイムズはまず、喫煙が文化的に劣等な野蛮人の習慣であることを指摘して、そうした習慣の模倣が恥であることを強調する。「われわれが赤面することもなく、スペイン人の奴隷となりはて、この世の滓で、いまだ神との聖なる約束からはのけ者にされている獣のようなインディアンをまねるまでに、自らを貶めるのであろうか」(J. B2)。しかもタバコは、身体の不潔な野蛮人がかりやすい汚らわしい病気である膿瘡性疾患の解毒剤として用いられ、その使用によって、そのような病気にかかっていると誤解されても仕方がないような代物である(J. B2)。ジェイムズのタバコ撲滅キャンペーンの第一弾は、アメリカ大陸の土着民にたいして文化的に優越していると思ひ込んでいるキリスト教徒ヨーロッパ人の恥の意識を喚起することから始まるのである。

つぎにジェイムズはすでに述べたモナルデスやハリオットと同じ医学上の土俵に立って、喫煙が健康な人にとっては有害でしかないと論証する。ジェイムズは当時の医学の基礎知識であったヒポクラテスやガレノスの

体液理論を前提に議論を進める。「人間は(四大要素から生ずる)四つの体液の組み合わせから構成され、それらは身体のすべての部分において交じり合って存在しているのだが、われわれという小宇宙、いいかえればわれわれの身体のうちの小世界のさまざまな部分は、それらの性質の多様性に応じて、ある部分はこの体液と、他の部分は別の体液と近い関係にあるという多様な傾向をもち、その結果これらの違いから身体全体を維持するための完全な調和が作り出される」(J. B3)。このような四つの体液の微妙なバランスによって保たれている健康は、異なる性質のものをこれらの部分のどれかにあてがうことで、バランスを崩し、健康は損なわれるのである。

熱く乾いた性質をもつタバコの煙の摂取は、その典型的な例である。ジェイムズはタバコがとりわけ脳にたいして有害であると指摘する。「脳が冷たく湿った性質をもつからといって、内側からは煙を吸い込むことで、外側からは貼り付けることで熱く乾いたものを用いるならば、そこからうるごうことのできるのは、過度の覚醒状態によって狂気へと突き進ませることだけである。というのは、脳の冷たさと湿り気は眠りや休息をもたらず唯一の

通常の手段だからである」(C.B)。医学上の見地からタバコの有害さを指摘することによって、ジェイムズはヒポクラテスやガレノスを土台とした医学論についての造詣の深さを示すことができた。権力よりもペンによる支配を目指すジェイムズにとって、自らの知力の誇示は戦略的に重要な活動なのであった。

以上のように医学上の効能もなく、身体にとって有害であることが判明している喫煙が、どうして人々に受け入れられるのかを、ジェイムズは医学を離れ、社会心理学的な観点から分析を進める。ジェイムズが喫煙流行の主要な原因とするのは「新奇なものへの愚かな愛着」である。新型の衣服の流行がその典型的な例としてあげられる。「われわれは海の向こうからある人が新しい型の衣服をもたらずとすぐに、今すぐそれを模倣しない者は、活発な人間とは考えられないことを、日々目にしないであろうか。その結果、手から手へとそれは広がり、ついには皆によって実践されるようになる。それ自身が便利だからというのではなく、流行になったという理由からだけである。そのようなものがわれわれ皆がもつ自然な自己愛の力であり、すべての人々の胸に育まれた羨望の

歪められた形なのである。われわれは仲間がすることすべてを模倣し、仲間ができることはすべてできることを証明しなければ満足できず、結果として猿のように他の人々のやり方を装うことで、自らの破壊を招くのである」(C.C)。ジェイムズは以上のような例につづけて、「この愚かな(喫煙という)慣習が広く好まれ受け入れられるのは、すでに述べた新奇なものへの偏愛と人々の誤りにのみ起源をもつ」(「内筆者による」)(C.C)と断言するのである。

現代にも通じるような「流行追い」の心理をジェイムズは、喫煙の流行をとおして一七世紀のイギリス社会にすでに見ていた。それはこの時代につづく消費社会形成をうながすひとつの主要な要因となるものでもあった。

国王ジェイムズの博識ぶりは、タバコ有益説の方法論上の誤謬の指摘にまでおよぶ。ジェイムズが取り上げるのは、「タバコを吸うことで多くの様々な人々が、様々な病気を治したし、他方でだれも喫煙によって害を受けなかったことが、証拠によって真実であることが発見された」(C.C)と主張するような、現代でもよく見かける素朴な経験主義者、単純な帰納論者の議論である。ジェ

イムズはまず、喫煙と病気の治癒が必然的な因果関係にあるのではなく、たんなる偶然の時系列上における連続にすぎないと、つぎのような例をあげる。「病人が一番病状が重いときに、タバコを服用し、その後病気が自然な治癒の過程をたどり、結果として健康を取り戻したとする。そうすればタバコがこの奇跡を引き起こした原因となるのであるうか」(170)。しかし単純でこみ入った思考ができない人は、「たまたまタバコを吸った後に、ひとつの病気を治したとなると、すべてタバコのおかげということになるのである」(171)。ジェイムズは喫煙反対派もまた同じような過ちに陥ることを自覚していた。「(多くの人がそうであるように)タバコを吸ったために死んだ人を見ると、他のいくつかの病気もそのせいにされるのである」(172)。

さらにジェイムズは、タバコ有益説を唱える人々の議論が肯定的事例だけにもとづく単純で複雑な帰納法によっていることを、少々えげつない例をあげて明らかにする。「年老いた売春婦は、日々の売春が健康によいと、その年まで何年も生きてきたことを売春のせいにし、多くの売春婦が若い身空で、膿瘡性疾患にかかって死んだ

ことを気にもとめない。そして年老いた酔いどれは、豚のような暴飲によって生命を永らえたと信じ込み、年を取る前にどれほど多くの者が酒に溺れて死んでしまったかを考えようとしぬい」(173)。もうひとつの近代哲学の基礎を築き上げ、単純な帰納法を批判する賢人ペイコンを学識顧問として召し抱える国王ジェイムズの批判には、哲学的な裏付けがあったのである⁽¹⁵⁾。

タバコ万能説もジェイムズには、いちじるしく馬鹿げた考えであった。ある病気には効能のある薬も、他の病気には有害となることは熟練した医師の常識だからである。正反対の効能をさえもタバコがもつと主張するタバコ万能説のいかかわしさを、ジェイムズはつぎのような例をあげて、白日の下にさらす。「眠る前に一服すると、健やかな眠りをもたらし、しかも眠たいときに一服するば、脳を覚醒し理解力を深める」(174)。

ジェイムズは、一步譲ってタバコに薬効があることを認めたくえで、それは病人を健康にすることがあるかもしれないが、健康な人を病気にすると主張する。「タバコの持続的な使用によって人は頭や胃を弱めるだろう。かれの四肢のすべては弱くなり、生氣はなくなり、最後

にはほんやりとした大食漢のように、無気力に陥ってしまうだろう」(C.C.)。そしてタバコの常用が現実にはイギリス人の健康を損ねてきたことが告発される。「この王国の多くの者がこの禍々しい煙りを常用するようになり、今ではかれらは、年老いたアル中が長い間しらふでいづづけることができないように、タバコを控えることができなくなり、いやし難い虚弱で不幸な体質に陥っている」(J.C.)。

作品の後半に入るとジェイムズは、タバコ擁護論者を想定した論争スタイルの記述をやめ、読者の倫理観に訴える戦術、すなわち喫煙は罪であるとして、喫煙者の罪の意識に訴える戦術に転換する。まずキリスト教の七つの罪源に準拠して、健康な状態にあるにもかかわらず、タバコを求めるのは罪深い恥ずべき欲望と宣告され、ついで第二に大酒飲みと同じ食欲の罪でもあると宣告される(Cf. J.C.)。そして第三の罪として、ジェイムズは国家とコモンウェルスにたいする罪をあげる。「人格と財産を国王とコモンウェルスの名誉と安全の維持のために捧げるよう、神によって創造され命じられたこの王国のすべての階層に属する貴兄らが、その両方共をできない

ようにするのは、すべてのうちで最大の罪ではないか」(C.C.)。喫煙という「悪習を持続することで、恥ずべきほどに意志薄弱」、身体虚弱になった人々は、平時においても戦時においても、国民としての義務を果たすことができなくなるからである。ジェイムズは「何についても止めることができなような習慣を身につける」中毒状態は、「どの国の人々にとってももっとも恥ずべきことである」とし、喫煙をその典型的な例とするのである(Cf. J.C.)。

ジェイムズが『反タバコ論』の最後で批判の対象とするのは、他者にたいする配慮を欠いた喫煙者の身勝手・自己中心主義である。喫煙と他者の苦痛や迷惑を考えない自己中心主義の結び付きは二〇世紀の現代にも至る所で見かけることであるが、ジェイムズによるつぎのような喫煙者にたいする告発は、時空を超えて現代にまで訴えかける力をもっている。「マナーを大切にすべき清潔で上品な食卓において、恥じることなくパイプを高々とかがげて席につき、タバコを嫌う人が同じ食卓で食事していることなどおかまいなしに、互いにタバコの煙を吐き出し、不潔でいやな臭いの煙をつくり、料理のうえに

臭い息をはきかけ、空気を汚すことほど傲慢でふしだらなことがあるだろうか (C.I.D.)。こうした無作法が起らないようにと、ジェイムズは皮肉をこめて、喫煙はヘビー・スモーカーの肺のなかのようにベトベトした油状のすすで真っ黒に汚れた台所にずっとふさわしいと、台所での分煙を勧めるのである (C.I.D.)。

ジェイムズはまた喫煙者が多数を占める社会のなかの人間関係を描くことで、ミルがおよそ二世紀後に述べた「個人の自由を抑圧する社会の中の多数者による専制」と似たような状況を浮き彫りにしている。「どんなときでも、どんな場所でも人々の目の前でタバコを吸うことが蔓延しているので、判断力や態度の健全な様々な人々が、ついには欲しくもないのに、タバコを吸うことを余儀なくされる」というのは「仲間内でパイプをくわえることを拒む者は、たとえタバコの悪習を我慢してでも友達付き合いをつづけようとしても、気難しいと奴と見なされ、よい仲間とは見られず、結局は孤立してしまいうからである」。ジェイムズは「手にタバコをもっていなければ、友人を心より迎えることができない」狭量な喫煙者集団の傲慢さ、現代風に言うならば「喫煙ファシズム」

を告発するのである (C.I.D.)。しかしその告発も、ローリィによって喫煙社会と化した宮廷において少数者となり、とぐるを巻く巨大な紫煙に苦しめられるだけでなく、多数者によって疎外されてしまったインテリ国王による煙のように消えていく力のないぼやきに聞こえなくもない。

ジェイムズは、喫煙の犠牲となる女性たちにも救済の手を差し伸べる。「夫が恥じることもなく、タバコの煙によって優美で健康な、そして清らかな顔色をした妻を喫煙常習者にするので、自らのかぐわしい息を腐敗させるか、さもなければ悪臭の拷問のなかで永遠に生活しなければならぬというような窮地に追い込むのは、なんと非道で人間性に反することであろうか (C.I.D.)。ジェイムズは、現代にも通ずるような反タバコ・反喫煙キャンペーンのコピーで、『反タバコ論』を結ぶ。「目には忌まわしく、鼻には不快、脳には有害で、肺には危険な悪習。タバコの悪臭を放つ黒い煙は、底知れぬ穴から立ちのぼる身の毛もよだつ地獄の煙になぞられよう」 (C.I.D.)。

国王ジェイムズは文化優越論、医学論争、社会心理分

析、科学方法論批判、読者の想像力や共感に訴えるレトリックなど、ありとあらゆる方法を駆使して有害なタバコの流行をくい止め、イングランドを健全な国へと戻そうと努めた。それは同時に喫煙という瑣末な問題を取り上げることで、生活において清潔で鋭敏な知力をもつ国民の模範、救世主として自らを売り込む行為でもあった。しかし国王としての威厳を高めるためのこの戦略も、国民の前に次第に明らかとなっていく国王のアルコール中毒寸前の飲酒癖によって台なしとなるのである。

おわりに

ジェイムズの反タバコ・反喫煙キャンペーンにもかかわらず、紫煙の勢いはいっこうに衰えることはなかった。『反タバコ論』が出版された一七世紀初頭には二万五千ポンドであったスペイン領アメリカ産タバコのイングラウンドへの輸入は、一七〇〇年には三八〇〇万ポンドにまで天文学的割合で激増する。そしてジェイムズが死を迎えようとしていた一七世紀前半までに、タバコは大衆消費財となり、成人人口の少なくとも二五パーセントが、少なくとも日に一度はタバコを一服するほどに普及して

いた。⁽¹⁵⁾ 父親同様に嫌煙家であった国王チャールズは、タバコの輸入からえられる関税収入の魅力に負けて、もはや反タバコ・キャンペーンを展開することはなかった。

ジェイムズが『反タバコ論』を執筆してからおよそ四世紀すぎた今、喫煙による年間の死亡者数は二一〇万人に上ると推定されている。それにもかかわらず、タバコは老化防止、ボケ防止に効能があるなどという医学上の知識を装った俗説などに支持されながら、根強い支持をえている。また他者の苦痛や迷惑を考えない自己中心主義は、依然として喫煙者固有の態度として猛威を振っている。身勝手にマナーの悪い人たちがタバコを吸うというのではなく、タバコのなかに自己抑制や他者への配慮を麻痺させる成分が含まれているのかもしれない。

以上のような諸事実を前にすると、四世紀前に国王ジェイムズが強権を用いて、喫煙者を弾圧し、喫煙者をタバコの煙による懲刑に処しなかったのは歴史上の過ちではなかったのか、とすら考えてしまう。そうした過激な議論をつづけることは学術論文にはふさわしくないの、ここでは一七世紀のインテリ国王による嫌煙論は、現在においてもなお有効性をもつはずと断言してペンをおく

ことにする。

- (1) 現在この国で入手しうるシェイムズのタバコ論争とその背景についての文献は、宇賀田為吉『タバコの歴史』(岩波書店、一九七三年)、グッドマン・和田/森脇/久田訳『タバコの世界史』(平凡社、一九九六年)、上野堅實『タバコの歴史』(大修館書店、一九九八年)をあげることができる。現代的な問題関心を歴史研究に入り込ませることはならないという筆者の普段の方法については、「思想史の方法をめぐる——スキナリアン宣言」、『一橋論叢』(一九九四年三月号)を参照。
- (2) Margaret Irwin, *That Great Lucifer: A Portrait of Sir Walter Raleigh*, London, 1998, p. 29
- (3) この時代のタバコ事情については、Christopher Hill, *Economic Problems of the Church*, Oxford, 1956, マッチェル/リーズ・村松訳『ロンドン庶民生活史』(みすず書房、一九七一年)などを参考にした。
- (4) オープリー・橋口/小池訳『名士小伝』(富山房、一九七九年)、一六四—一五頁。
- (5) 同掲書、一六五頁。
- (6) *The Works of Sir Walter Raleigh*, ed. by Oldys and Birch, vol. 1, pp. 74-5.
- (7) グッドマン、前掲書、六五頁。
- (8) *Joyfull Newes out of the Neue Founde Worlde writ-*
ten in Spanish by Nicholas Monardes and Englished by
John Frampton anno 1577, AMS Press, 1967, p. 3. 以下引用は本文中の括弧内に記す。
- (9) グッドマン、前掲書、六七頁。
- (10) Thomas Hariot, *A Report of the New Found Land in Virginia*, London 1588 in *English Experience*, p. C3.
- (11) cf. Hariot, Thomas 1560-1621 in *Dictionary of National Biography on CD-ROM*, Oxford University Press, 1995.
- (12) *The Works of Christopher Marlowe*, ed. by Tucker Brooke, Oxford, 1910, p. 636.
- (13) Cf. Jonathan Goldberg, *James I and the Politics of Literature*, John Hopkins University Press, 1983, p. 26.
- (14) James D. *A Counterblast to Tobacco*, London 1604 in *English Experience*, To the Reader. 以下引用は本文中の括弧内に記す。
- (15) ベイコンは国王に献じた『ノウム・オルガナム』のなかで、「単純な帰納法を「単純枚举にもとづき、幼稚でデタラメに結論をくだし、矛盾の実例によってくつがえされる危険を免れず、ただ既知のありきたりのことしか考慮に入れない」方法としてこきおろしている。
- (16) グッドマン、前掲書、八〇頁参照。
(一橋大学大学院言語社会研究科教授)